

# 富岡多恵子の作品世界の変遷における ガードルード・スタインの影響について

土田 順子

## 1. はじめに

富岡多恵子<sup>1)</sup>はことばによる表現の可能性を信じ続ける作家である。妥協を知らないことばに対する探求を通して、富岡は、日本人であり、女性であり、日本語で表現する者としてのアイデンティティを問う。性とエスニシティと母語は、富岡の創作活動における中心的テーマである。富岡は詩から小説へと移行していった。大学在学中の1957年に自費出版した第一詩集『返禮』が翌年のH氏賞を受賞し、富岡は新鋭の詩人として文学的出発をはたすのである。しかし詩人としての地位を固め富岡は、やがて小説へと道を変えていく。

富岡が創作活動を始めた時期は、女性解放運動がさかんになってきた時代と重なっている。1960年代に隆盛を極めた女性解放運動は第二波フェミニズムと呼ばれ、女性差別を生み出し女性の自己実現を阻む社会構造を分析し、伝統的な性別役割分担を批判する思想として飛躍的に発展していったが、富岡はその思想の展開と歩調を合わせながら、独自の文学世界を切り拓いていった作家である。富岡は文化的に構築される性差に意識的な作家であり、女性の視点から根源的に性や家族の構造に潜む欺瞞や矛盾を追及していった。

富岡の作品世界の変遷とそこでの意識変化の過程をたどっていくと、富岡が社会的概念であるジェンダーを容易に受容することができないことがわかる。詩を書き始めた頃の富岡は、自分を両性具有的な存在とみなしていた。それがある時期から、生物学的に女性に生まれついた自分は男性性を持つことは不可能なことであり、詩人にはなれないのではないかと、女性に創造性はないのではないかとという疑いを持つように変化していくのである。創作者であろうとする時、女性であることは富岡にとって障害でしかない時期が続くが、受け入れがたいものを受け入れることによってしか創作の道が開かれぬという袋小路から富岡が抜け出すのに大きな影響を与えたのは、詩作の時期に出会ったガードルード・スタインである。スタインの詩に興味を持った富岡は、長い間スタインに対して関心を持ち続け、やがて自らスタインの詩やエッセイの翻訳を手がけるようになる。さらにスタインの小説を翻訳したことが、スタインの富岡に対する影響を決定づけたと考える。

ガードルード・スタインは、1874年にアメリカの裕福なドイツ系ユダヤ人の商家に生まれたが、1903年に兄のレオのいるパリに渡り、そのままフランスで生涯を送った。スタインは、小説や詩の他さまざまな文学形式を使って言語の可能性に迫る大胆な実験に挑み、「モダニズムの女傑」といわれたが、書いたものはほとんど売れず、レオとともに当時まだ評価の定まらないセザンヌ、ピカソ、マチスなどの作品を買い集め、若い芸術家たちのパトロン的存在として名が知られていた。スタインはヘミングウェイに「失われた世代」と命名し、影響を与えたこともよく知られているが、作家としての評価は当時高いものではなかった。スタインにとっても女性であることはジレンマであり、秘書のアリス・B・トクラスと同性愛関係にあったことは、スタインの作家としての自意識と密接に関わっている。

富岡はスタインからどのような影響を受けたのか、そして二人にとって書くことと女性であることはどのように関わりあうものであったのか。富岡の先行研究ではスタインとの関連性を扱ったものはなく、スタインの研究においても地域と時代を隔てた富岡にどのような影響を与えたかという研究はない。そのため筆者は博士學位論文「富岡多恵子の作品世界の変遷とその推移におけるガートルード・スタインの影響について」で、富岡に及ぼしたスタインの影響を分析し、富岡の作品世界の変遷とその中での意識変化の過程をスタインの変化の過程と比較することを目的として、富岡とスタインの影響関係を実証し、文体とテーマという二つの観点から考察した。

富岡は詩作の時期から最初の小説を書くまでの間に最も強くスタインの影響を受け、その後はスタインの影響を基礎にして独自の文学世界を切り拓いていったと考えられる。前掲論文の第1章と第2章では富岡がスタインに影響された時期を扱い、どのような影響をスタインから受けたかを分析した。富岡が独自の作品世界を構築した時期については第3章と第4章で扱っているが、第3章では富岡とスタインの家族に関する初期の小説を分析している。富岡もスタインも小説を書き始めた頃に自分の家族をモデルにした小説を書いている。二人とも小説で最も書きたかったことは家族の問題であることがわかるが、そこには女性が創作者を目指す時、避けて通れない問題がある。富岡とスタインが女性としてどのような問題を抱えていたのかそれぞれの作品を分析して比較し、二人とも小説を書く上で母親が負の意味で重要な存在だということを考察した。第4章では二人のその後の作品について比較し、スタインにとってトクラスという存在の重要性を見出した。

本論文は前掲論文の第1章と第2章に焦点を当て、富岡がスタインからどのような影響を受けたかをみていくものである。富岡がどのような時代を生き、どのような社会的背景の中で創作の世界を切り拓いていったかをたどりながら、スタインとの影響関係について考察する。

## 2. 富岡多恵子の詩作期におけるガートルード・スタインの影響について

富岡多恵子は1935年に大阪市西淀川区伝法町に生まれた<sup>2)</sup>。商人という環境のため家には本というものはないが、小説のおもしろさを知ってからの富岡は、親に隠れて小説を乱読するようになる。大阪府立大阪女子大学に在学中に友人から小野十三郎の詩の入門書をももらったことから、富岡は詩に興味を持ち、自分でも書き始める。書いた詩を小野にみてもらい、小野の勧めで自費出版したのが第一詩集『返禮』である。先に述べたようにこの詩集はH氏賞を受賞し、富岡は詩人として文学的出発をはたす。

富岡は小野の詩論の影響のもとに詩を書き始めたとはいえ、すでに具象性と抽象性を結びつける独自の詩作方法を持っていた。詩を書き始めた頃の富岡は、自己に関して両性具有的なジェンダー意識を持っており、女性の詩人としての能力や創造性に疑いを持つことなく革新的な創作者であろうとした。『返禮』にはジェンダーの役割に関する世間の常識を笑い飛ばそうとする富岡の特徴がよくでて「身上話」がある。

富岡がガートルード・スタインの詩に興味を持ったのは、次のような春山行夫による日本語訳を読んだためである。

何故鳥等デアツタカ

二度ト私ガ見ナイノヲ決心シタ時私ハ三ツノ全体ガ唯一ノ明瞭ナ変化シ易イ褐色ニヨツテツクラレ  
テイタノヲ感じタ。私ハ狐ヲ意味シナカツタ。コレガ何故私ガ訪問シナイカデア。喜ンデ行ケ。進

ンデナセ<sup>3)</sup>。(中略)

富岡が春山のカタカナと漢字による直訳調の翻訳によるスタインの詩に惹かれたのは、春山訳を通してわかる、易しいことばによる前衛的な抽象性をスタインが有していたからである。富岡も難解なことばを使わずに具象的な事柄で抽象的な詩の空間を作ろうとしていた。富岡はスタインの詩に自分の詩の方法との類似性を見出し、訳詩では男性的にみえる詩を書いたのが実は女性であることにも関心を持った。

富岡の詩にスタインの影響が最初にみられるのは、第二詩集『カリスマのカシの木』(1959)である。富岡は、スタインが72歳で死ぬ時言ったという有名なことば「問は何？」を「庭を耕す」の中でそのまま使っている。

富岡は1960年に池田満寿夫と一緒に暮すために上京する。池田との生活は富岡の意識を徐々に変化させていく。それも芸術家同士の男と女の生活は、富岡に自己の中にある女性性と真剣に向き合わざるを得なくしていく。

その後富岡はオートマティスムの方法で第三詩集『物語の明くる日』(1961)を出版するが、富岡の詩に対する考えは変化しつづけ、第四詩集『女友達』(1964)ではその頃富岡が共鳴していた西脇順三郎の詩論に影響を受けた詩を書いている。『女友達』には漢字とカタカナだけで書かれた詩が二篇あり、富岡が春山によるスタインの詩の翻訳に魅力を感じていたことがわかる。

富岡は徐々に女性の能力や創造性に懐疑的になっていくが、女性であるという劣等意識にとらわれることなく、自分のことを天才だと自己認識して創作するスタインに対してより興味を深めていった<sup>4)</sup>。富岡はスタインの詩のリズミカルな繰り返しの多用や抽象的な表現に影響されながら、スタインの詩をオートマティスムや西脇順三郎の詩論に近い方法、つまりその時々で自分の採用した詩の方法に引き寄せて理解し、スタインに関心を持ち続けた。

富岡は『女友達』を書いた後、女性の能力に対する疑い以上に自分の採用してきた詩の方法に対して疑いを持ち始める。富岡は今までの詩の方法では自分の怒りを掬い上げてくれないと考えるようになり、深い模索の状態に入っていった。

### 3. 富岡多恵子の転換期におけるガードルード・スタインの影響について

富岡多恵子にこの模索の状態から抜け出させ、詩から小説への移行という転換をもたらした要因として、三つの要因の影響が大きいと考える。第一の要因は、池田満寿夫との生活を通して富岡が直面した男性とのジェンダーの差である。家事を女性の仕事とする伝統的な性別役割分担の考えを持ちながら、金を稼ぐことに男女平等を要求する池田の矛盾した論理が端緒になり、富岡は自分が男性の劣位に置かれた女性であるということを明確に意識するようになった<sup>5)</sup>。富岡が男性とのジェンダーの差に意識的になるきっかけの根底には池田との生活体験があり、モダニズムの詩で表現できなかったことは、このような男性に対する怒りの感情である。それを契機に富岡はウーマン・リブやフェミニズムの考え方に強い関心を示すようになり、女性の問題は彼女の小説のテーマの一つになっていく。

第二、第三の要因については富岡が1965年に渡米したことが関わっている。一つは、自分を育んできた過去の再発見であり<sup>6)</sup>、今までの詩は自分の過去の経験に目を塞ぐことによって書いたものではないかという反省を富岡にもたらした。その反省は小野十三郎や西脇順三郎の詩に対する懐疑に結びついていき<sup>7)</sup>、春山行夫によるガードルード・スタインの詩の翻訳に対する疑いにもなっていった。もう一つは、エー

ル大学でスタイン関連の膨大な資料や写真を見て、スタインを具体的な実像として捉えることができたことである<sup>8)</sup>。この三つの要因は相互に関係しながら富岡に創作者としての転換をもたらしたのであり、富岡は日本のモダニズムの詩に対する懐疑が増す一方で、スタインに対してますます関心を深めていき、その興味はスタインの詩以外の作品にも広がっていった。

#### 4. 富岡多恵子のガードルード・スタインの翻訳体験

富岡多恵子はガードルード・スタインのエッセイや小説を翻訳することによって、詩だけではわからなかったことに気づいていく。スタインの詩だけを読んでいる頃の富岡は、春山行夫の漢字とカタカナによる男性的な翻訳を魅力的に思い、その解釈にとらわれて呪縛されていたといえるだろう。富岡はスタインのエッセイや小説、とくに小説を翻訳することによって、スタインの春山訳は誤訳だと確信するのである。

スタインはたくさんの文法や言語に関する論文を書いているが、富岡はスタインの小説を翻訳する前に、『アメリカ講演録』(Lectures in America) (1935)におさめられた「詩と文法」(Poetry and Grammar)というエッセイを訳出している。それが『文学展望』に載ったのは1975年だが、この翻訳に添えた解説で、富岡は「七、八年前に書きこトバでしてあったのを、話しこトバに書き直したのである<sup>9)</sup>」と記している。その間に富岡はスタインの小説を翻訳し、彼女のスタインに対する理解が変化したことを示している。

スタインの「詩と文法」と富岡の解説を比較すると、富岡は記号化された名詞を嫌うなどスタインの独特の言語観に共感していることがわかる。富岡のスタイン解釈には自分の考えに合わせた誤解もあるが、スタインの散文が書きことばの文体ではなく論理を明確にしない「叙述体」や「口語体」で書かれていると理解したことは、富岡自身の散文を考える時に重要な意味を持った。論理を明確にする散文を嫌っていた富岡は、書きことばの明確な論理性を崩さなければことばの死をはやめると考え、散文を書く場合にはいかに書きことばの中で話しことばを使うかに腐心していた<sup>10)</sup>。

富岡はスタインの散文について、話しているリズムで文章が作られていくので、書きことばの、とくに英語の長い文によくある後ろから前へと論理が作られることがきわめて少ないこと、一種の話しことばなので、一つのことばが出てくるとそのことばをすぐ引き続き説明し、コンマなしで続けていくので繰り返すと無駄に意識的であること、どんなことばもおろそかにしないが、必要以外のことばを使わないから文章が素っ気ないことなどの特徴があると分析している<sup>11)</sup>。これが富岡のいう「叙述体」であり、このように富岡はスタインの散文を理解した。富岡は論理を明確にする散文を嫌っていたのだが、スタインの散文のように書けば解釈の両義性を保ったままに書くことができるということに気づいたのである。

富岡にスタインの書くものが「叙述体」だと気づかせるのに最も大きな影響を与えたのは、スタインの小説の翻訳である。富岡は、スタインの*Three Lives*(1909)を1969年に『三人の女』として翻訳している。

『三人の女』は、「お人好しのアンナ」(*The Good Anna*)、「メランクタ」(*Melanctha*)、「やさしいレナ」(*The Gentle Lena*)の三つの物語で構成されているが、書かれたのは、「お人好しのアンナ」、「やさしいレナ」、「メランクタ」の順である。三つとも下層階級の女性を扱った物語であり、どれも感傷を排し、描写を極力おさえた筆致で書かれている。このような簡潔な文が後にハードボイルドと呼ばれ、ヘミングウェイに影響を与えることになる文体である。

富岡が最も注目したのは最後に書かれた「メランクタ」である。この作品について、スタイン自身が『ア

リス・B・トクラスの自伝』(The Autobiograph of Alice B. Toklas) (1933) で「文学における 19 世紀から 20 世紀への最初の明白なステップ<sup>12)</sup>」と自画自賛するように、「メランクタ」は三つの物語の中で最も新しい文体を作り出している。

「メランクタ」は混血の思春期の黒人娘のメランクタの物語で、量的にも内容の面でも他を圧倒している。メランクタは黒人の若い医師ジェフ・キャンベルに会い、惹かれるようになる。理想家で理論家のジェフ・キャンベルと情熱的で自分の感情に正直なメランクタは、その違いを乗り越えて愛し合い、関係を持つが、考え方の相違から結局二人は破局を迎える。

この物語では、繰り返しながら少しずつ変化していくスタイン独特の文体が展開される。とくにメランクタとジェフ・キャンベルの二人の場面は、二人の会話も含めて、心理的な描写とともに音楽的なリズムを作り出している。例えば次のような文にその特徴が表れている。富岡による日本語訳も引用するが、富岡は「今ではもう日毎に」「今では毎日」「今では日毎に」「このころは日毎に」と少しずつ変化させながら、ことばによるリズムをうまく捉えていることがわかる。

Every day now, Jeff seemed to be coming nearer, to be really loving. Every day now, Melanctha poured it all out to him, with more freedom. Every day now, they seemed to be having more and more, both together, of this strong, right feeling. More and more every day now they seemed to know more really, what it was each other one was always feeling. More and more now every day Jeff found in himself, he felt more trusting. More and more every day now, he did not think anything in words about what he was always doing. Every day now more and more Melanctha would let out to Jeff her real, strong feeling<sup>13)</sup>.

今ではもう日毎にジェフは近くなっていき、本当に愛しているようだった。今では毎日、メランクタはさらに奔放にかれに愛をそそいだ。今では日毎に、ふたりともがこの強烈でまっとうな感情をますます強くしているように見えた。ますますもって、このころは日毎に、かれらはお互いにいつも何を感じているかがわかっていくように思えた。ますますこのころになると、日を追う毎に、かれは前より信頼していく自分がわかった。このころになると日を追う毎に、ますますいつもしていることを言葉で喋ることで考えなくなった。今では日を重ねる毎に、メランクタは自分の本当の強い感情をジェフにあからさまにあらわすようになった<sup>14)</sup>。

富岡は『三人の女』の解説やエッセイで、小説を翻訳してスタインのことばは「徹底した口語体<sup>15)</sup>」だと気づいたと語り、会話もカギカッコに入れられてはいるが、通常の小説のようにすでに書きことばになっている会話とは違い、スタインの小説ではあくまで話しことばだと分析している<sup>16)</sup>。

ここでいう「徹底した口語体」とは、「詩と文法」の解説で富岡が「叙述体」としたものであり、話しているリズムで文が作られ、繰り返しと無駄に意識的で、必要以外のことばを使わない「素っ気ない文章」という特徴を持つ文体のことである。富岡はスタインの小説の翻訳からこの文体について多くを学んだ。詩でも散文でも口語体をいかに使うかに心をくわえていた富岡にとって、スタインの小説が口語体で書かれていると認識したことは大きな収穫であった。この体験は富岡が自分の小説を考える場合、とくに会話をいかに書くかの方向づけをした。

このように富岡はスタインの文体から大きな影響を受けたと考えられるが、スタインの小説の翻訳体験の最大の収穫は、スタインの小説が女性をテーマにした女性作家による作品だと気づいたことである。富岡は、スタインの *Three Lives* という題を『三つの人生』ではなく『三人の女』という題にし、女性がテー

マであることを強調している。富岡は、表面的には男性的な詩を書くスタインが、女性作家としてのジレンマを内面に有していることに気づいた。女性であることに劣等感を持っていた富岡は、スタインをより身近な存在に感じ、自分の中の女性性も受容する契機になった。その結果、富岡は春山によるスタインの詩の男性的な訳を誤訳だと認識し、自身の訳では女性が話すような口語体で訳したのである。

富岡は『地理と戯曲抄』(1992)で、先に引用したスタインの春山訳と同じ部分を次のように翻訳しているが、富岡訳と春山訳の違いは明瞭である。

どうして鳥がいたんでしょう。

二度は見ないでおこうと思ったとき、三ツともがみんな色変りする茶色っぽいものでできているのが感じられたんです。狐のことをいいたいじゃありません。訪ねていかないのはこういう理由なんです。楽しくおやりになってください。どんどんと<sup>17)</sup>。(中略)

富岡訳と春山訳を比較すると、富岡は春山訳のような漢語的表現を避けて和語に変え、文末表現も「でしょう」や「ください」を使って意図的に女性が話しているように訳している。富岡は、スタインが女性の内面を有した作家及び詩人であり、春山の解釈のような男性的な詩を書くはずがないと確信している。

富岡がスタインの小説の翻訳体験から学んだことは、詩よりも小説を書く時のヒントになり得るものだったが、富岡は詩という形式にまだ愛着があり、小説を書く決心がつかなかった。富岡にとって詩は最も心惹かれる文学形式であり、モダニズム的な詩では表現できなかった男性に対する怒りの感情や自分を育んできた家族や庶民の生活というテーマを、富岡はまず詩で表現しようとした。

## 5. 富岡多恵子の最後の詩集と最初の小説

今までの詩の表現方法に懐疑的になっていた富岡多恵子ではあったが、まだ詩の可能性を信じて最後の詩集『厭芸術反古草紙』(1970)を出版する。詩集を完成して、やはり詩では表現できないことがあることに気づき、富岡は小説へ移行する。

最初の小説『丘に向かってひとは並ぶ』(1971)は、『厭芸術反古草紙』で表現しようとして表現しきれなかった自分のルーツである家族や庶民の生活というテーマを扱ったものであり、富岡の家族の三代記といえる作品である。この小説の文章に、富岡が認め共感したスタインの文体の影響がみられる。

『丘に向かってひとは並ぶ』の地の文は非常に素っ気なく、繰り返しが多用されるが、次にそのような一部を引用する。

児オばかりこしらえやがって、とおタネさんは他人事のようにつぶやき、そのつぶやきは他人にはよくきこえたが、本人にはきこえなかった。児オばかり産ましやがって、ともおタネさんは大きな声でひとりごとをいった。そのひとりごとが、だれもない時のひとりごとのうちはよかったが、そのうちだんだん、そばに他人がいても吐き出されたのである。村の八百屋でおタネさんは菜や大根を買い、銭を払って振りかえりざま、児オばかり産ましやがって、とひとにきこえる声でつぶやいたりしたのである。ところがおタネさんは、ツネやんにも子供たちにも面と向って一度も愚痴をいったことはなかった。ツネやん、正月に着物の一枚も買うてえな、といったことはなかった。ツネやんもおタネさんを一度も叱りつけたことはなかった<sup>18)</sup>。

「児オばかりこしらえやがって」という独り言や「……はなかった」の文末の繰り返しは、先に引用した富岡の訳による『三人の女』の「メランクタ」の部分の、「今では日毎に、……だった」の繰り返しに

よく似ている。この小説の文章は、素っ気ない地の文と繰り返しと無駄に意識的だと富岡が認識したスタインの文の特徴と重なり、そこにスタインのハードボイルドといわれる文体の影響がみられる。

『丘に向かってひとは並ぶ』は富岡自身の家族の物語にもかかわらず、観念的で抽象性の強い作品である。それは富岡が手探りの状態で小説を書いたからであるが、富岡はこの作品において、詩から小説へというジャンルの転換とスタインによるモダニズムの文体の獲得という二つの大きな実験を試みた。

その後富岡は『丘に向かってひとは並ぶ』を起点とし、スタインのモダニズムの文体の影響を基礎にした前衛性と大阪ことばや浄瑠璃などの大阪文化を融合させつつ、その物語に登場した人物について具体的に描く作品を書いていく。それは富岡が自分の家族や庶民の生活を表現するためには、スタインの前衛性だけではなく自分を育んできた文化にもっと分け入っていく必要があったためであろう。

## 6. おわりに

富岡多恵子は、ガードルード・スタインのエッセイや詩を翻訳することによって、さまざまな影響を受けた。スタインの文法論に関するエッセイの翻訳で、富岡はスタインの独特の言語観に共感し、スタインの中にことばに対して同じ闘いを挑んでいる共闘者を見出している。

その後富岡はスタインの小説を翻訳するが、その体験は富岡が今までスタインに対して持っていた印象を一新させた。富岡は、スタインが女性をテーマにした小説を書いた女性作家であり、女性作家としての内面を有していることに気づいた。その頃富岡は女性であることに強い劣等意識を持っていたが、スタインをより身近な存在に感じ、自分の中の女性性も受容する契機になった。つまりスタインが富岡に及ぼした大きな影響は、その硬直したジェンダー観から脱却するように促したことである。

さらにスタインの小説の翻訳体験は、詩を疑いながらも詩に愛着があり小説を書くことに躊躇していた富岡に、小説を書く勇気を与え、どのように書いたらいいかの方向性を与えた。具体的な影響は、富岡自身が「素っ気ない文章」と「徹底した口語体」と分析したスタインの文体である。富岡の最初の小説『丘に向かってひとは並ぶ』は最もスタインの文体の影響がみられる作品である。スタインの文体はヘミングウェイに影響を与え、後にハードボイルドと呼ばれるようになる文体であり、富岡の文学が乾いた印象を与える基礎にはスタインの影響がある。

ヴァージニア・ウルフは『自分だけの部屋』(A Room of One's Own) (1929) で、女性詩人や女性作家を一つの連続体として捉え、理想の女性芸術家を存在せしめるために女性による文学伝統の継承を提唱している。富岡はウルフの主張のように、スタインが女性であるからこそその文学の影響を受け、継承したといえる。

スタインからみると、地域と時代を隔てた富岡に言語の壁を越えて影響を与えたということがいえる。スタインはアメリカ文学のキャンソンの見直しによっていかにモダニズムに貢献したかを指摘されるようになったが、富岡は同時期にスタインの革命的な言語実験を自分の文体に取り入れようと模索していたのである。

### 註

- 1) 富岡多恵子の名前の表記は、ある時期から多恵子から多恵子に変わったが、本論文では多恵子を用い、文献に関しては底本の刊行時点の表記になっている。

- 2) 富岡多恵子「略歴」『現代詩文庫 15 富岡多恵子詩集』思潮社,1968年,120-124ページ。
- 3) 富岡多恵子『はすかいの空』中央公論社,1983年,40ページ。
- 4) 富岡多恵子『厭芸術浮世草紙』中央公論社,1970年,167-168ページ。
- 5) 富岡多恵子『藤の衣に麻の衾』中央公論社,1984年,15ページ。
- 6) 富岡多恵子『ニホン・ニホン人 新装版』思潮社,1971年(第1版,1968年),16ページ。
- 7) 富岡多恵子『西鶴のかたり』岩波書店,1987年,116-118ページ。
- 8) 富岡,前掲『ニホン・ニホン人 新装版』,51ページ。
- 9) ガートルード・スタイン「詩と文法」富岡多恵子訳『文学展望』(筑摩書房)第9号,1975年4月,369ページ。
- 10) 富岡,前掲『厭芸術浮世草紙』,176ページ。
- 11) スタイン,前掲論文,369-370ページ。
- 12) Stein, Gertrude. *Gertrude Stein—Writings 1903-1932*. New York: The Library of America, 1998. p.714.
- 13) Ibid., p.177.
- 14) スタイン,ガードルード『三人の女』富岡多恵子訳,中公文庫,1978年(第1版,1969年),175ページ。
- 15) 同上書,320ページ。
- 16) 富岡多恵子『現代の視界3 言葉の不幸』毎日新聞社,1976年,78ページ。
- 17) スタイン,ガードルード『地理と戯曲抄』金関寿夫・志村正雄・富岡多恵子・ぱくきょんみ訳,書肆山田,1992年,309ページ。
- 18) 富岡多恵子『丘に向ってひとは並ぶ』中央公論社,1971年,16ページ。

## 土田順子氏 学位請求論文要旨（課程博士）

「富岡多恵子の作品世界の変遷とその推移におけるガートルード・スタインの影響について」

本論文は、富岡多恵子に及ぼしたガートルード・スタインの影響を分析し、富岡の作品世界の変遷とその中での意識変化の過程をスタインの変化の過程と比較することを目的としたものである。富岡とスタインはそれぞれ独自の文学世界を構築した女性作家であるが、その自意識形成には類似点もある。文化的背景も時代も異なる二人の作家の複雑なジェンダー意識を明らかにしながら、社会と自意識との葛藤から生まれたテーマを表現するための文学的スタイルをどのように展開していったかを考察した。

富岡は1935年に大阪で生まれた。大学在学中の1957年に自費出版した第一詩集『返禮』が翌年のH氏賞を受賞し、富岡は新鋭の詩人として文学的出発をはたすのである。しかし詩人としての地位を固めた富岡は、やがて詩という表現形式を捨てて小説へと道を変えていく。富岡の作品世界の変遷とその中での意識変化の過程をたどっていくと、富岡が社会的に女性と認知されることに違和感を抱えていたことがわかる。詩を書き始めた頃の富岡は自分を両性具有的な存在とみなしていたが、詩を書いていくうちに女性であることから生まれる劣等意識は増幅し、詩人としての自己の能力や創造性に懐疑的になっていく。

富岡にそのような劣等意識の袋小路から抜け出させ、自身の硬直したジェンダー観を再考するように促したものは、スタインとの出会いである。詩作中心の時期に春山行夫の翻訳によるスタインの詩に興味を持った富岡は、スタインに対して関心を持ち続け、やがて自ら詩やエッセイの翻訳を手がけるようになる。その後スタインの小説を翻訳したことが、富岡に対するスタインの影響を決定づけた。

スタインは富岡よりも半世紀以上前の1874年にアメリカで生まれたが、1903年に兄のレオのいるパリに渡り、そのままフランスで生涯を送った。スタインは小説や詩のさまざまな文学形式を使って言語の可能性に迫る大胆な実験に挑み、「モダニズムの女傑」といわれた。しかし書いたものはほとんど売れず、作家としての評価は当時高いものではなかった。スタインにとっても女性であることはジレンマであり、秘書のアリス・B・トクラスと同性愛関係にあったことは、スタインの作家としての自意識と密接に関わっている。

富岡は、詩作の時期から最初の小説を書くまでの間に最も強くスタインの影響を受けている。第1章と第2章では富岡がスタインに影響された時期を扱い、どのような影響をスタインから受けたかを分析している。

スタインが富岡に及ぼした影響は、女性であることに劣等意識を持っていた富岡に、その硬直したジェンダー観から脱却するきっかけを与えたことであり、詩を疑いながらも詩に愛着があり小説を書くことに躊躇していた富岡に、小説を書く勇気を与えたことである。具体的な影響は、富岡が「素っ気ない文章」と「徹底した口語体」と分析したスタインの文体である。富岡の最初の小説『丘に向かってひとは並ぶ』は最もスタインの文体の影響がみられる作品である。

スタインからみると、地域と時代を隔てた富岡に言語の壁を越えて影響を与えたということである。スタインは、フェミニズム批評などによる正典の見直しによっていかにモダニズムに貢献したかを指摘されるようになったが、富岡は同時期にスタインの革命的な言語実験を自分の文体に取り入れようと模索している。

その後富岡は、スタインの影響を基礎にして大阪文化や浄瑠璃の語りの文体ともいえるものを導入して独自の作品世界を構築していく。第3章と第4章では、富岡とスタインの作品世界の変遷の比較を試みて

いる。富岡もスタインも小説を書き始めた頃、自分の家族をモデルにした作品を書いているが、そこには創作者であろうとした二人が抱えていた問題がある。

二人に共通するのは、ことばに対する興味とともに小説を書く上で母親が負の意味で重要な存在だということである。ただスタインにはトクラスという母親以上に重要な存在との出会いがあった。スタインは『アメリカ人の成り立ち』という家族の物語を書くこととトクラスが母親代わりになることで、母親に対する複雑な感情を容易に乗り越えることができたが、富岡は母親に対する怨みにも似た感情を持ち続け、それが富岡に多くの小説を書かせたところは異なる。しかし、母と娘の関係は両者の文学的主題の核をなすものである。富岡がスタインから受けた直接的な影響は文体だが、主題においても富岡とスタインは時代と地域を越えて共鳴しているといえる。